第 14 回夢アイデア

百笑園　　―私が育てた農園がみんなの笑顔を育む―

１．計画背景

１-１．私たちの住んでいる町、東京都足立区の概要

足立区は、東京23区の北東端に位置しています。東は中川をはさんで葛飾区、南は隅田川をはさんで北区、荒川区、墨田区、西は埼玉県川口市、鳩ヶ谷市、北は草加市、八潮市、と多地域に接しています。
区総面積は53.20km2、東京23区の約9%に当たる広さです。

足立区は、一般に西新井大師が良く知られています。平安時代、空海により創建されて以来、大師は庶民の参詣で賑っていますが、かつては学問の場としても名を馳せていました。江戸時代、足立一帯は田畑が広がる、近郊の豊かな穀倉地帯でした。そこに千住が日光街道の宿場として定められ栄えたことから、市街地としての発展が始まります。明治になると、東京が拡大するにつれて田園風景の中に住宅や工場が建ち並んでゆき、大正の関東大震災では被害が比較的少なくて済んだため、足立区へ移り住む人が増えました。また、昭和の始めには、江東、墨田など東京の下町を水害から守る目的で、明治末に着工した荒川（放水路）が完成しています。戦後になり、高度成長期において足立区も急速に都市化が進み、土地区画整理事業が盛んに行われました。急増する東京の人口を支えるため、都営住宅や公団、公社の集合住宅が大量に建設されています。昭和40年代には区内の大規模工場等が区外へ移転し、40年代の終りに区を東西に横断する環状7号線が開通して、50年代頃に現在の足立区の基本的な形がほぼ出来あがりました。
区の人口は、ここ数年64万人程度で推移し東京23区中5番目です。

近年では平成12年に、放送大学が千住に移転、平成16年には「北千住駅西口再開発」が完了し、以前にも増して賑いを見せています。さらに平成18年9月には「東京藝術大学千住キャンパス」が開校、また平成17年には区の東部に「つくばエクスプレス」が開通し、西部では「日暮里・舎人線」が平成19年度に開通しました。
足立区は、下町の要素を残しながら、常に成長している町であります。

１-２．東京都足立区の社会背景

足立区は都心に近く、河川や緑地などの自然が豊かで、人のあたたかみが残っています。しかし、全般的に明確な地域イメージが不足しており、情報発信の少なさと相俟って、魅力ある環境として受け留められていない傾向にあります。多くの人々がそこに住んでみたいと感じるような、そしてそこへ行ってみたいと思うような、景観的にも美しいまちづくりが必要と考えられています。

２．計画地

計画地は、日暮里・舎人線沿線の［舎人周辺地域］から［扇周辺地域］とします。

計画対象地である日暮里・舎人線沿線の舎人地区周辺から扇地区周辺は足立区の緑地面積の 40%を占めるほどの緑豊かな場所です。東京においてこの緑残る地域は貴重な財産です。豊かな農風景やごぼう市などが地域のアイデンティティとして残っており、また近隣の荒川区に貸出ている荒川区民農園など、地域住民に限らず農と密接な関係にある地域と言えます。

３．提案内容

都心から 30 分で気軽に農ライフを楽しむための沿線地域を主軸としたクラインガルテン（市民農園）によるまちづくりを提案します。

「眺める緑」だけでなく「体験する緑」をまちに増やし、人々の交流や賑わいが溢れる緑の景観を創造します。

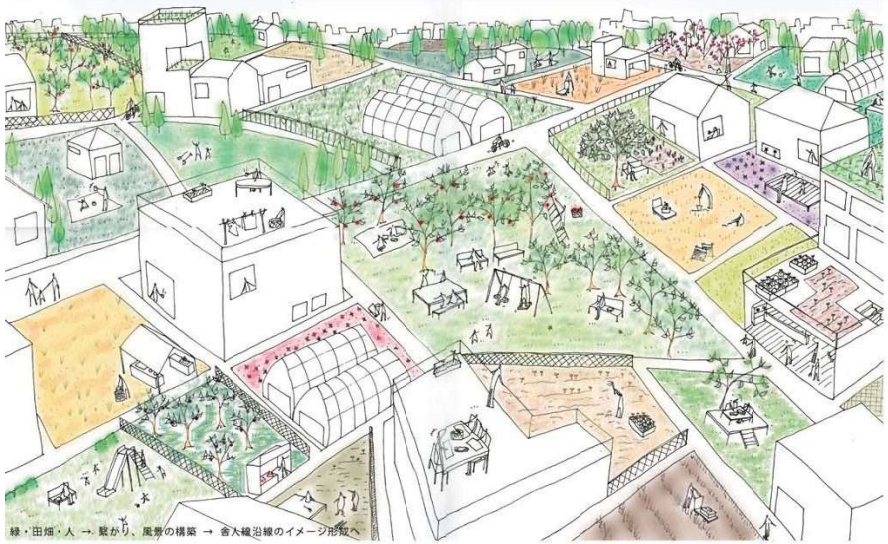
さらに、農風景によるまちの彩り方と農を通じたコミュニティが形成される仕組みを計画し、景観的な美しさだけではなく、都市住民が真に健全な精神を持ち、健康で明るいまちを創生します。

４．まとめ 及び“キャッチフレーズ”

本計画が、計画のモデルケースとなり、都市部における明るい緑と人々のコミュニティと笑顔を創出する提案になることを祈って…

“ 百笑園　ー私が育てた農園がみんなの笑顔を育むー ”

百笑園



緑・田畑・人 → 繋がり、風景の構築 → 舎人線沿線のイメージ形成へ

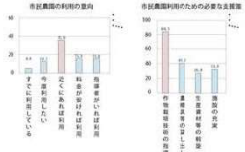
「私が育てた農園がみんなの笑顔を育む」そんなまちを創造します。

計画対象地である日暮里・舎人線沿線の舎人地区周辺から扇地区周辺は足立区の緑地面積の40%を占めるほどの緑豊かな場所です。東京においてこの緑残る地域は貴重な財産です。豊かな農風景やごぼう市などが地域のアイデンティティとして残っており、また近隣の荒川区に貸出している荒川区民農園など、地域住民に限らず農と密接な関係にある地域と言えます。

そこで、都心から30分で気軽に農ライフを楽しむための沿線地域を主軸としたクラインガルテンによるまちづくりを提案します。「眺める緑」だけでなく「体験する緑」をまちに増やし、人々の交流や賑わいが溢れる緑の景観を創造します。従来の個々の家庭菜園は豊かな緑を持続、発展しますが美しい風景を生み出しているとは言いがたいものです。また、新交通の介在による新たな環境にまちの個性を消失することが危惧されます。本計画では農風景によるまちの彩り方と農を通じたコミュニティが形成される仕組みを計画していきます。

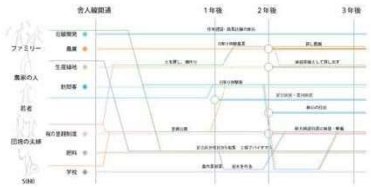
地域住民と来訪者、人と緑が共生し合う豊かな環境が景観の美しさだけではなく、都市住民が真に健全な精神を持ち、健康で明るいまちを創生していきます。

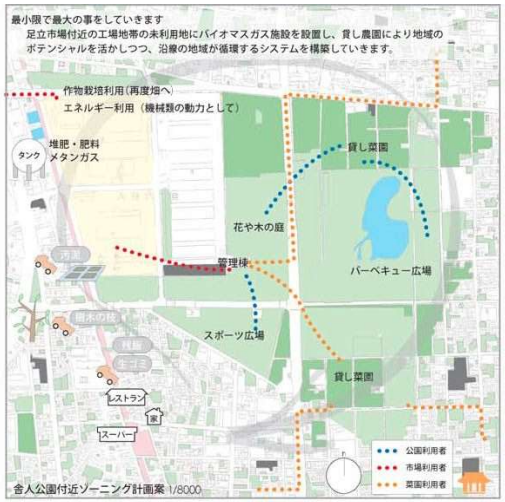
計画範囲を中心として、住宅が建設され、増加していくのと同時に緑も増えていきます。



■Relation Diagram

■Passage of time





舎人公園付近ゾーニング計画案 1/8000

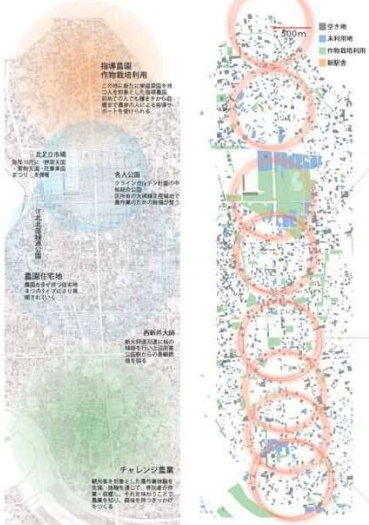
管理棟内観パース

既存の建物や機能を活用しつつ、建物をなるべく作らずに舎人公園は計画の中核になっていきます。管理棟は苗木や種の販売もするサービスステーションとして活用していきます。

舎人公園計画案 1/1600

■計画ゾーニング

農業のできる範囲としては、駅を中心に直径1kmの同心円を描いていきます。アクセスは自動車ではなく電車のため、徒歩で通える貸し農園となり管理も気軽に行える距離になります。



ロードサイドの歩道はオープンカフェや商業店舗を配置し植樹され、過ごす場所となります。

西新井大師へと続くみちは、
小中学生達に桜の苗木の植樹を行ってもらいます。桜の里親制により、みんなで街並みを創るという意識が生まれます。

チャレンジ農業にて農作業を手伝いながら、また宿泊・滞在しながら、農業を知り、興味を持つきっかけをつくります。

■野菜税とその循環システムの構築

野菜生産の義務化　特区として

住宅専用 → 住宅地+生産農地（セットにて安くなる）
∴生産高を足立区に納める

Type1. 家の購入者自身が野菜を育てて売る。（市場などにて）

Type2. 土地を貸し菜園として貸し出し。その賃貸料にて支払う

足立区：野菜税を・・・ →桜の里親の木の管理維持費
→生ゴミなどのバイオマス費用

結果として

植栽の管理により街は美しくなり、生ゴミの肥料化によりその肥料より生産された野菜類は、また市民に還元されます。

■農地の増加手法の提案

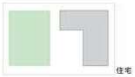
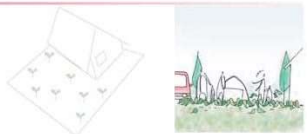


Fig.1 住宅のあり方

戸建+農地 タイプ
自分の庭orr貸し出し可　生産義務



契約者同士互いに気の知れた、いい仲間になります。

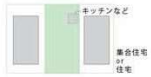


Fig.2 集合住宅のあり方

集住+貸し農園+集住 タイプ
トイレなどの機能を併せ持つ

住人同士で過ごす場所として、畑だけでなく木を植えるなど立体的な樹木景観も形成されます。

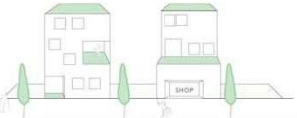
Fig.3 菜園区画のあり方

区所有 タイプ
コミュニティスペース+貸し農園

大勢で様々な人たちが共同で、土に触れ合い汗を流す地域のコミュニティガーデンとして賑わいます。

Fig.4 ビルディングのあり方

共有庭 タイプ
共同の家庭農園



必ず、家庭菜園が行える程の共同の庭を設置します。

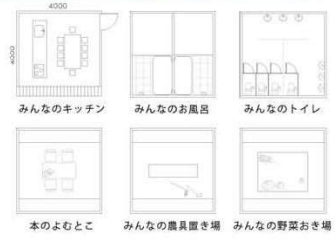
■沿道の植栽について

街路に施す植樹を舎人線から見たとき、後背地の緑地とつながるようにすることで領域の境界をなくし視線が広がるようにします。また、沿道にオープンカフェなどを設け植樹を楽しむ場所を作ります。

■駅の色との色彩計画

四季折々の彩を見せるよう、いろいろな種類の野菜を植えます
１区画ごと同じものを作り、景観として各駅の色との調和を図っています。パッチワーク上に風景が広がって行き、各駅の色は地域ごとの景観の意識として強く残っていくようになります。

■各畑に配される諸ボリュームと機能



みんなのキッチン　みんなのお風呂　みんなのトイレ

本のよむとこ　みんなの農具置き場　みんなの野菜おき場

農地になるべく負荷をかけず、生活行為として最小限のボリュームを配置していきます。

ロードサイドと街区内計画案 1/600